



さくらオンラインプログラム
日本・台湾卒業設計
国際クロスエスキース 2021

東北工業大学

×

中原大学

開催にあたって



石井 敏

東北工業大学
建築学部建築学科 教授
副学長・建築学部長

2009年に2名を派遣して以来継続してきた両大学間の交流は、2019年度の4名派遣、中原大学からの3名受け入れを最後にCOVID-19で途絶えていました。そのような中、2021年3月には曾光宗先生に本学の卒業設計公開審査会へオンライン参加していただきました。そして今回、JSTさくらオンラインプログラムに採択されて5日間のオンライン交流が実現しました。図面を介してコミュニケーションできるのが建築の魅力と特徴です。両国に対する興味・関心を高め、両国の歴史や文化に対する理解を深め、そして設計の進め方や考え方の相違等を学ぶ貴重な機会となりました。今後に繋がる大きな刺激を与え合ったことでしょう。一日も早く、お互いに訪問し会える日が再び来ることを祈っています。



曾光宗

中原大学
設計学院建築系 教授

這次十分榮幸可以與東北工業大學一起參與「さくらオンラインプログラムクロスエスキース2021」。國際交流活動一直都是建築系學生，在大學正規學習之外重要的課外學習方法，非常具有價值。藉助於跨國的交流，除了可以擴展學生的國際視野之外，同時也可以增進學生的設計思考，強化建築設計能力。而在今年，雖然受到疫情的影響，跨國的移動無法展開，但是透過視訊的方法，仍然可以超越時空間的限制，兩校的老師們都可以充分地討論，同學們也可以看到其他同學的優點，進而相互學習，這種效益是非常難得的。同樣位處於亞洲的台灣與日本，不論從地理、歷史、或文化的角度來看，長期以來兩國的關係極為深厚，相信藉由這次的視訊國際交流活動，更能讓兩校的師生，共同探討建築的未來，以及人們更舒適的居住環境。

今回は東北工業大学と一緒に「さくらオンラインプログラムクロスエスキース2021」に参加してとても光栄に思います。国際交流活動は建築学専攻の学生にとって、大学の学習以外で重要な学習方法であり、非常に価値があります。国際交流によって、学生の国際的な視野を広げるだけでなく、学生の設計思考を広げ、建築設計能力を強化することもできます。今年は、コロナの影響で国境を越えた移動はできませんでしたが、オンライン交流を通じて、時間と空間の制約を超えて、両校の先生たちが十分に議論でき、学生たちが他の学生の良さが見えて、お互いに学べるというメリットは非常にありがたいものでした。同じアジアに位置する台湾と日本は、地理的、歴史的、文化的な観点から見て、長い間、両国の関係が非常に深くつながっています。今回のオンライン国際交流活動を通じて、両校の教師と学生が共に建築の未来や人々により快適な住まいや環境について話し合えると信じています。

プログラムについて

1. 事業名

2021年度 さくらオンラインプログラム
日本と台湾における卒業設計のクロスエスキース

2. 参加大学

東北工業大学
中原大学

3. 事業実施責任者

東北工業大学 学長 渡邊浩文

4. 日程

- 1) 2021年11月11日
- 2) 2021年11月25日
- 3) 2021年12月02日
- 4) 2021年12月09日
- 5) 2021年12月16日

5. 会場

zoomによるオンライン開催

6. 各回プログラム

11/11	学生による日本・台湾の紹介 発表形式と今後のプログラムの説明
11/25	各大学学生によるプレゼンテーションと クロスエスキース
12/02	各大学学生によるプレゼンテーションと クロスエスキース
12/09	日本・台湾の若手建築家によるレクチャー (卒業設計と現在の作品)
12/16	各大学学生による再プレゼンテーションと クロスエスキース



東北工業大学



中原大学

講師

日本・東北工業大学
渡邊 浩文 福屋 粧子
石井 敏 有川 智
竹内 泰

台湾・中原大学
陳宇進
曾光宗
黃俊銘

通訳

日本・宮城学院女子大学 巖 爽

ゲストクリティーク
錦織真也(建築家)
蘇富源(建築家)

参加学生

東北工業大学 小野寺萌佳 佐藤美侑子
4年生 岩見夏希 木村華
鎌田勝太 吉田人志
及川龍人 西城瑞樹

中原大学 劉學賢 蔡孟廷
5年生 柯廷融 陳朝洋
陳新 廖婕苓
張詠晴 黃湛凌

TA

小山田陽太(修士1年生)
吉岡昇一(4年生)
五十嵐健太(3年生)



Daily therapy train

心理から読み解く設計手法と新たな空間体験の提案

岩見夏希

東北工業大学 福屋研究室



現在の日本に蔓延している、『頑張る美学』、『世間体』、『見栄』。その凝り固まった文化が精神科医への足取りを重くさせ、自分を責め、心を蝕むスピードを加速させる。日々の喧騒に飲まれ自分を見失ってしまう前に、自己を内省しうる場所は都市のどこに存在しうるだろうか。心の余裕を生み出し自分で自分の負の感情にアプローチできる場を提供できるのは、慢性的な対処療法ではなく非日常的な空間なのではないだろうか。『人間の無意識的な空間認知』から読み解く、精神的ストレスを和らげ受け入れ、自分で対処できるマインドに導く空間の設計手法を、都市の喧騒の一環として認識される電車の車両に投影し、社会から根本療法ができる空間を提案する。

現今，“努力美学”、“麵子”和“虚榮”這些觀點和想法正在日本蔓延開來。這種固化的文化使精神科醫生的職業壓力和負擔變得更沉重的同時，也加速了我們對自我的譴責和心靈的腐蝕。在被日常的喧囂吞噬而迷失自我之前，在一座城市裏，什麼樣的地方能使人們進行自我反省？能夠為心靈創造出富餘的地方並非是日常的場所，而應該是而非日常的空間吧。通過將從“人類無意識的空間認知”中解讀出的空間設計方法投射到被認為是城市喧囂的一部分的電車車廂上，我提出了一種能夠從社會開始進行根本治療的空間，該空間設計方法用於緩解和接受自己，並能夠將人的心態和精神狀態引導到一種近乎於平和且能夠進行自我調度的狀態。



追憶と展望

地域景観再認識のための拠点創出

及川龍人

東北工業大学 不破研究室



「景色を見る」とはどのようなことだろうか。「昔はこう見えた」「ここからはこんな景色だ」など、時代や場所によって景色にも様々な見え方があると思う。また景勝地は、実は何らかの拠点や地域の景観資源として扱われてきた可能性がある。しかし時代の流れや市街地拡大などの影響で、「地域景観」に対する認識は薄れつつあると考える。また市街地拡大は地域交通の問題を生み、その中で拠点同士の繋がりが絶たれてしまうことで、人々が生活をするうえで支障をきたしてしまうこともある。そこで仙台市の景観を対象として、地域景観への再認識と地域間ネットワークの再構築を目指す拠点の創出を行う。手段として新たな「バス路線」と「バス停」＝「拠点」を設計し、仙台の景観のこれからを考える空間を設計する。

你認為“看風景”的意思是什麼？“某處的風景往昔是這樣的”“那未來這又將是怎樣的一副景色呢？”等，我認為根據時間和場所的不同，景色也定會隨之各有不同。另外包括一些名勝古跡，實際上它們可能一直被視為是某種基點或是某個地區的景觀資源。但由於時代的變遷和市區擴大等的影響，人們對“地域景觀”的認識正在逐漸淡化。此外，城市街區的擴大會產生區域性的交通問題，在這種情況下，基點之間的聯係就會被切斷，從而影響人們的生活。因此，我將以仙臺市的景觀作為研究對象，以重新認識當地景觀和重建當地的區域間網絡為目標先創建一個基點。我設想了一種新的“巴士路線”和“巴士站”＝“基點”的這種想法，然後以這個想法為思路設計出一個“思致未來仙臺景觀”的空間。



町に潜む共育

小野寺萌佳

東北工業大学 石井研究室



「百聞は一見に如かず」「百見は一験に如かず」学校教育派時代が何年、何十年経とうと、目的は変わらない。それぞれの個性や能力を伸ばし、その可能性を開花させず基礎を培うことは学校教育にとって重要なことである。しかし、現代では様々な問題から学校にはバリアが張られ、外との交流をせず、学校内だけで過ごすことが多くなっている現代。またこの世の中には情報が溢れ、学校に行かなくても勉強ができる環境が整っている。そんな中、学校に行く意味とはなんだろうと考えることも少なくはないだろう。今回は町の中に移動教室を設けるという提案である。分散した移動教室では町でしかできない体験を授業とし、学ぶことの重要性和住み馴れてしまった町の魅力再確認してもらう場とする。

“百聞不如一見”“百看不如一驗”無論學校教育派時代更迭多少年,目的都始終如一。對於學校教育而言,發展學生個人的個性和能力,並不使學生的潛力直接開花結果而是培養其基礎是很重要的。但是在現代,由於各種各樣的問題學校被設置了一道阻礙:即不與外界產生交流,學生進入校園後就只被侷限於學校內的情況甚多。在現如今這樣一個信息氾濫的時代,已經具備了即便足不出戶也能進行學習的環境和條件。那麼在這種情況下很多都會產生“去學校的意義是什麼?”“這種想法吧?我這次的提案是:在城市中設置移動教室。在分散的移動教室裏,將只有在城市、街區能體驗到的體驗作為教育課程,讓人們重新意識到學習的重要性的和再次感受並看到我們已習居的城市的魅力。



節目に記憶を振り返って

儀式空間再考による地方再興

鎌田勝太

東北工業大学 新井研究室



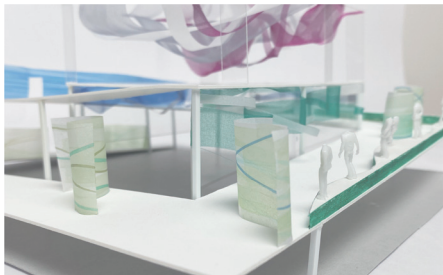
宮城県大崎市古川を対象地とし、人生の節目である卒業式や成人式、結婚式や葬式など儀式的場を街の記憶の集積地にする提案を行う。近年、地方の街や集落では過疎化が進み、都市部への人口集中が進んでいる。この問題に対して「住民の記憶」に着目し、地方再興の基盤に活かせるのではないかと考えた。生まれ育った地元への愛着と記憶は関係している。学校帰りに毎日通った道、夕飯の材料を買いに行くスーパーなど、どこにでもあるかもしれない、しかしその人にしか分からない、記憶の中で輝いている場所があるはずである。住民が生活の中で得た記憶を再確認し、それを集積させることで、個人スケールでは愛郷心の生成、街スケールではその土地ならではのアイデンティティの形成を目指す。

以宮城縣大崎市古川作為研究對象,我提議將作為人生轉捩點的畢業典禮、成人儀式、婚禮、葬禮等進行舉辦各種儀式的場所建造成城市記憶的聚集地。近年來,古川當地的街區和定居點的過疏化加劇,人口不斷地嚮城市集中。對於這個問題應著眼於“居民的記憶”,我認為它可以作為地域復興的基礎。我們對傢鄉的依戀和記憶是互相產生關聯的。每天放學迴傢的道路和經常去買晚餐食材的超市等。也許到處都有這樣的關聯,但應該是只有那個人自己知道的,且在記憶中閃閃發光令人難以忘卻的某個地方。我們的目標是通過重新確認居民在生活中產生的記憶,並收集這些記憶,由以各人產生的愛鄉之心再擴大到以城市街區為範圍,從而形成一種對當地持有的認同感和歸屬感。



空間を織る 布と繕いによる設計提案

木村華
東北工業大学 福屋研究室



服の価値、可能性を考える場となることで、人々の服に対する意識を変えたい。服をより長く着るには修復したり、デザイン性を上げたりなど様々だ。ファストファッションは安く手に入ることですぐに捨て、すぐ新たな服を購入するという悪循環を招いていると考えた。捨てる服を少しでも減らすこと、こうしたらまだ着られる、という考えを持たせ服の可能性に気づかせたい。提案はリメイクを行える場所に古着を持ち寄り、材料にする。服を修繕、改良したい人がここに持ってきて、好きな布や、古着を組み合わせる新たな服に生まれ変わらせる。そこには講師やデザイナーがいて、レクチャーしながらリメイク作品を作り上げる。リメイク作品を展示することで、リメイクに自信がない人にも服の可能性を気づかせられる空間になるのではないかと。

通過將某個地方變成一個可以思考服裝的“價值”和“可能性”的場所，進而來改變人們對服裝的意識。為了讓一件衣服穿得更久，可以對其進行修復改造，也可以提高它的設計性。造成“快時尚”的原因主要是因為它們不僅可以用很便宜價錢買到，還可以被輕易地迅速取代或遺棄，所以造成了人們對服裝的“快購快棄”的惡性循環。若希望盡可能地減少舊衣服被丟棄的現象，應讓人們產生一種想法，即如果這件衣服被這樣改修後那我還會繼續穿它的想法，讓人們意識到衣服的“可能性”。此提案是把舊衣服帶到可以“翻新”的地方，使它變成“材料”。想要改良舊衣服的人將它們拿到這裏，把喜歡的布料、舊衣服進行組合拼搭，並改造成新衣服。在這裏有講師和設計師，他們一邊講授一邊製作新衣服。然後在這個空間展示這些新作，那這會不會成為一個讓那些對翻新的衣服沒有信心的人也能意識到每件衣服的可能性的空間呢？



海と暮らす街への提案

西城瑞樹
東北工業大学 不破研究室



東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた気仙沼市、それでも海との共生を選択したこのまちの中で漁師の存在は欠かせないものとなっている。気仙沼市魚町地区。漁港が近く、まちと海の連続する風景が見られ県内外から入港する漁船を待つ。東日本大震災後に防潮堤が建設され風景が変化してきた。気仙沼市唐桑町。合併によって気仙沼市になった地域であるが少子高齢者と交通空白がみられこの地域と市街には隔たりが感じられる。そこで、魚町には漁師に拓かれ、迎える空間として、漁師の番屋。住民と地域を結び、地域を創り出す空間として、船のような建築を海上に建築する。唐桑町には船での移動販売を行う船着き場を建築する。漁師を大切にすまち、交流がうまれる設計とする。

氣仙沼市在東日本大地震的海嘯中曾遭受到了巨大的破壞，但在這個選擇與大海共生的城市中，漁民的存在是不可或缺的。氣仙沼市魚町地區漁港很近，可以看到這座城市和大海的連綿風景，以及正等待著從縣內外進港的漁船。東日本大地震後，這裏修建了防潮堤，因此這裏的風景也隨之發生了變化。氣仙沼市唐桑町。這是一個由於合併而成為氣仙沼市的地區，但由於少子高齢者和交通空白，這裏與城市之間存在著隔閡感。於是，魚町被漁民開拓，並作為漁民們放哨的地方。在海上建造類似於船的建築以將這裏和居民連係起來。在唐桑町建造了一個碼頭，用於漁民在船上進行流動銷售。這既是一個重視人的城市，又是一個能夠使人與之產生交流的設計。



和紙産業を継承する白石の風景

佐藤美侑子
東北工業大学 石井研究室



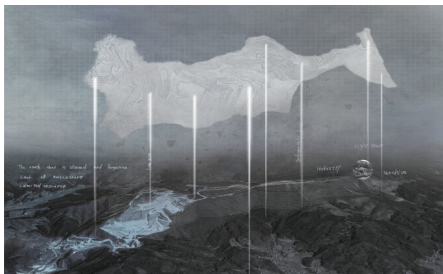
宮城県仙南の白石市に白石和紙という古くから受け継がれてきた伝統的工芸品がある。白石和紙は地元の原料である楮から作られ、熟練された職人の手によってしなやかで頑丈なものに仕上がる。しかし生活を取り巻く環境の変化が伝統的工芸品産業の衰退を促し、後継者不足や都市化により白石和紙産業も存亡が懸念されている。そこで和紙産業の基盤となる未来の職人を養い、技術文化を継承していく工房をまちの中に提案する。見習いが職人のもとで直に学び、住民や外部来訪者が和紙づくり・ワークショップを体験できる環境をつくり、白石地区の既存ストックには宿泊、展示・販売機能を展開する。このようなまち全体で長期的に和紙産業の生業が繰り広げられていくプログラムを考える。

在宮城縣仙南的白石市，有一種古老的傳統工藝品叫白石和紙。白石和紙是由當地的原料「楮」而製，並由工藝嫺熟的匠人們手工製作而成的柔軟但堅固的紙。但是，生活環境的變化促使了傳統工藝品產業的衰落，並且由於後繼乏人和城市化，白石和紙產業的存亡令人擔憂。因此，我提議培養作為和紙產業基礎的未來匠人、提議在城市中建設繼承技術文化的工作室。我們將建造一個能讓學徒在匠人的指導下直接進行學習和體驗的環境，讓居民和訪客們體驗和紙的製作，並在白石地區現有的體量中開展住宿、展示和銷售功能區。我打算做這樣一個可在整個城市長期開展日本紙業生計的項目。



Mine Remediation

吉田人志
東北工業大学 新井研究室



少子高齢化の進む日本では地方の田舎ほど顕著に表れ、後継ぎ不足や人口の流出が問題となっている。地方の若い世代は地域の文化を知らずに育ち、便利で過ごしやすい場所へ流れてしまう。福島県田村市にある滝根町は大滝根山から石をとり採掘産業による雇用によって人口流出を食い止めている。大滝根山の大部分は石灰質であるため採石によって山はどんどん削られ山はなくなり、いずれは人々の記憶からもなくなってしまうだろう。若い世代は便利な時代に後押しされて地域の文化が忘れられようとしている中で、削られていく大地の歴史を残すジオミュージアムを計画する。植林による緑化と木炭を利用したバイオリメディエーション技術によって樹木は日陰に集まる生き物たちの居場所をつくる。

在少子老齡化加劇的日本，越是農村地區表現得越明顯，後繼乏人和人口外流成為社會問題。地方的年輕一代在不了解地方文化的情況長大，然後嚮更便利舒適的地方移居。位於福島縣田村市的瀧根町從大瀧根山開採取石，通過開採產業的就業來阻止人口流失。大瀧根山的礦石大部分是鈣質的，採石會使山體不斷地被削去，山也會隨之消失，那麼它遲早也會從人們的記憶中消失吧？年輕一代在便利時代的推動下，逐漸遺忘了地域文化。在這種背景下，我計劃建造一個地理博物館，留下不斷被削減的大地歷史。通過植樹造林進行綠化和利用木炭的生物修復技術來修復樹木，這樣一來，樹木就可為聚集在陰涼處的生物創造棲息之地。



CHANGES, EDGES, CONFLICTS

reconstruction of public space

劉學賢
中原大學建築系黃俊銘教授指導



變遷・邊界・衝突

-公共空間再建構-



城市凍土層: 重新融解被封存的時間與空間

Revive the stagnant time and atmosphere in the forgotten place

柯廷融
中原大學建築系黃俊銘教授指導



Shinchu Dongmen Market



海洋城市

人與海洋關係重塑

陳新
中原大學建築系曾光宗教授指導



マカオは素朴な風土の場所だが、急速な経済成長から、人と人の間の距離は次第に遠くなり、過去の風景は存在しない。都市の雰囲気は急速に変わり、集まる場所はショッピングモールやカジノなど資本主義的な場所へと変貌した。填海區を境線として、新旧の都市空間の違いが現れ、一方には生活感がある低い家、となりには高層ビルが立ち並ぶ。マカオが中国に復帰後、中国からきた新移民の人口がマカオ総人口の半分以上を占める。大量の新移民がマカオで自分たちの集団と文化を築き始め、コミュニティから経済まで中国色に染まり始めた。過度で速いリズムは、地元の人々の注意と反感を引き起こし同時に地元の人々に地元文化の重要性を気づかせた。変えることのできない都市の発展の下でマカオの本当の姿を知ってもらい、都市の密度を広げ、対話のプラットフォームを提供する。交流を通じてコミュニティの本質に回帰し、行方不明の気持ちを取り戻される場所がまだあることを望んでいる。

1970年代米国の援助を受けて台湾が急速に発展し、立体的な市場、伝統的なビジネスを上方に拡大しようとする新しいビジネスモデルが開発された。しかし、1990年代、この市場モデルは没落し、最終的には都市の空間毒腫になった。新竹の東門市場には、かつて台湾の最も先進的な高層市場で、今は常駐夜市は廢墟風の写真を撮る空城に転落し、一部の住民と趣味の店だけが残っている。1910年に建設され、1936年には日本政府が外郭に新たな商圈を増設し、1970年代には、政府が東門市場の改造に乗り出し、敷地の内部が外部より新しい特殊現象をもたらした。私は、台湾の伝統的な市場の無形文化を継続し、東門に現代的な消費空間を再構築し、新たな人の波をつくることである。

基隆は海に隣接する都市だが、子供の頃から基隆で育った私は海から遠く離れているような気がする。歴史的な図を見ると、港の建設と産業の発展が私たちを海から分離させていることがわかる。私は、基隆の北東角にある正濱漁港を研究の中心に据えて、かつては北台湾最大の港だったが、1980年代以降、各国の経済海域の宣言と漁類資源の減少で正濱漁港は没落し始めた。荒廃した漁業施設や放置された漁船が、人と海の溝を作った。漁業産業チェーンの変化により、周辺の建物に新たな観光計画ができたが、訪れた観光客はこの漁業の歴史文化を理解できなかった。地域全体の計画や廃スペースの再利用で、訪れた人たちが海から切り離されたこの地域に入り、漁業の歴史や技術を再認識してほしいと思っている。

今の高雄市は没落した時代にあると思っている。歴史的な隆盛期に比べて相対的に没落しているだけでなく、この都市が大規模な商業建設に力を入れていたため、住民の生活の場も没落している。我々にはもはやこの街に栄光を感じていない。この都市の発展の脈絡を振り返ると、「大港埔」地区の昔盛今衰は「高雄陸軍病院」が都市の中で重要な地位から完全に地景の中に消えた物語を物語っている。「二二八事件」と「美麗島事件」が台湾社会に与えた数十年にわたる影響を目撃してきたこの歴史的現場は、どのような姿でこの没落した集団記憶を再現し、伝承すればよいのか、この都市に対する私の問いかけである。理想的な建築に対して想像することから、ミシェル・フーコーが提唱した他なる空間(Heterotopias)を引用することで、私の創作は都市の喪失の徴候を述べながらも、喪失感を修復する役割を果たせるはずだ。「都市に隠れていた記憶を、かつての輝かしい歲月、そして昔の人々が家を守った物語を、日常を通して、大港埔の人々の心に焼き付ける」というのが私の最終目的である。

澳門，一個民風純樸的地方，但自從經濟快速增長，人與人之間的距離逐漸變遠，過往的風景不復存在。都市的氛圍由悠閒變得急促，聚集的地方亦轉變成為商場、賭場等等充斥着資本主義的地方。以填海區為分界線，顯現出新舊都市空間的差異，一邊是具生活感的矮房，緊接的卻是高樓林立的都市。回歸中國後，中國下來的新移民的人口佔了澳門總人口一半以上。大量的新移民開始在澳門建立自己的群體與文化，由社區到經濟都開始染上中國的色彩。過快的節奏亦引起了本地人的注意和反感，同時令本地人留意到本土文化的重要性。在不可改變的都市發展下，希望仍能有一個地方，讓人知道澳門的真實面貌，在都市中打開缺口，拉開城市密度，提供人與人對話的平台，透過交流來回歸社區的本質，找回失蹤的情懷。

西元1970年後受美援影響台灣快速發展，因此全台發展出了一種特別的立體式市場，一種企圖把傳統商業往上延伸的新商業模式。但隨著1990年代新式商業的導入，這樣的市場模式便發生了直線式的沒落，最終變成城市裡的空間毒瘤。我的基地選在新竹的東門市場曾經是台灣最先進的高層市場，擁有全台第一座電梯，但到了現在1樓變成常駐夜市，而23樓淪為拍攝廢墟風的空城只剩部分居民跟興趣取向的店家；最早的東門市場建於1910年，到了1936日本政府開始在外圍增建新的商業圈到了1970年因為設備及建物老舊政府便開始對東門市場進行改造，也造成了基地內部比外部年輕的特殊現象。我的畢業設計打算專注於延續台灣傳統市場的無形文化並在東門重塑當代性的消費空間，將被無視的通道打開帶入新的人潮。

基隆是一個緊鄰海洋的城市，但是從小生長於基隆的我卻覺得距離海洋很遠。從歷史的疊圖可以發現海港的建設與產業發展讓我們與海洋分離。我將位於基隆東北角的正濱漁港作為我的操作核心，它曾經是北台灣的最大港，在1980年代以後，隨著各國經濟海域的宣布以及漁類資源的減少，正濱漁港開始沒落。原本荒廢的漁業設施以及閒置的漁船讓造成人與海洋之間的隔閡。漁業產業鏈的變化讓周邊的建築有了新觀光規劃，但是前來的遊客並非能夠了解這裡的漁業歷史文化，我希望藉由整體區域的規劃及廢棄空間的再利用，讓來訪的人能進入這個使我們與海洋分離的區域，並重新認識漁業的歷史與技術。

我認為，現在的高雄市正處於一個失落時代。無論是對比於歷史上的興盛時期而相對失落，抑或是這個城市致力於發展大型商業建設而常民生活場域沒落；曾幾何時，我們不再為這座城市感到光榮。回顧這座城市的發展脈絡，「大港埔」地區的昔盛今衰道出了「高雄陸軍病院」在城市中從地位舉足輕重到完全消失於地景之中的故事，這個見證「二二八事件」和「美麗島事件」對台灣社會影響數十載的歷史現場，該以甚麼姿態再現並傳承這份失落的集體記憶，是我對這座城市的質問。出於我對理想建築的想像，並引用傅柯提出的異托邦理論，我的創作應能陳述城市失落的病徵，同時扮演修復失落感的角色。「把隱沒在城市裡的記憶，透過日常把曾經輝煌的歲月、以及從前人們捍衛家園的故事，重新烙印在大港埔人的心中。」是我的最終目的。



RENOVATOPIA

復醒之邦：一座失落城市的修復計畫

張詠晴
中原大學建築系曾光宗教授指導

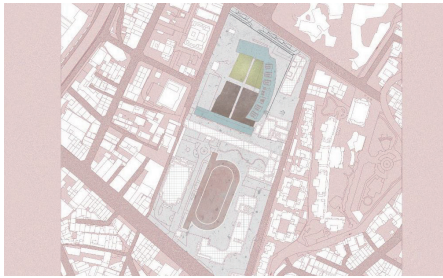




31+n社團的新國中校園 新竹 | 發展中城市 site 新竹市、 光武國中

蔡孟廷

中原大學建築系黃俊銘教授指導



新竹新キャンパススポーツと光武国中の最大のキャンパスの特色であるサークル設計を組み合わせ、現代的な國中キャンパスを設計する。12歳～15歳までの青少年の最も重要な心身の発達段階に焦点を当て、どのようなキャンパスがその年齢の学生に有益であるかを研究する。国は、身体の発育、急速な成長及び人間関係を重視して、多くのいじめを発生させた。いじめはすでにスローガン化、平面化の議題に転落して、重視され処理されていない。思春期の初期に直面する中学生に対して良いキャンパスを計画し、全体のキャンパスの問題を改善する。新竹、ニューキャンパス運動新竹市が科学技術都市に発展したのは少数人口が急速に増加した都市であり、科学園區の設立は多くの知識人を引きつけ、そのため新しい教育環境の需要がある。新キャンパス運動は1999年の921大地震後の再建校舎から始まり、2017年に新竹が新キャンパス運動を提案した。2.0キャンパスの新しい定義、形式について検討する。

以國中生身心發展行為研究為基準，結合新竹新校園運動與光武國中的最大校園特色社團設計當代性國中校園。

設計 由問題意識出發，針對12至15歲青少年最重要的身心發展階段，研究如何才是對這個年紀好的校園，國中經歷性別建構初期，對於身體發育、快速成長以及人際關係的看重，衍生許多校園霸凌事件，而我認為霸凌已經淪為口號化、平面化的議題，沒有得到重視以及處理，應要針對面臨青春初期初期的國中生設計，以良好校園規劃來改善整個校園問題。

新竹，新校園運動新竹市發展成科技城，是少數人口快速增加的城市，科學園區的成立，吸引許多高知識份子，因此有新式教育環境的需求。新校園運動從1999年921大地震後的重建校舎開始，2017年新竹提出新校園運動2.0，探討對於校園的新定義・形式。



TAG&BOMBING of ARCHITECTURE

Making a Contemporary Street
through GRAFFITI

陳朝洋

中原大學建築系黃俊銘教授指導

GRAFFITI TAG & BOMBING of ARCHITECTURE

Making a Contemporary Street through GRAFFITI



落書き人の目と建築人の手を通して、現代的なアートの街を作る。地帯は新北市永和区の博愛街。かつてガーデン都市として計画されていた永和市は、計画の暴走の中、台全体で人口密度が最も高い都市となった。このような背景のもと、混雑する永和にも快適で理想的な公共空間を提供しようとする試みから、博愛芸術街が誕生した。しかし、従来の車道の代わりに芸術が現れ、芸術街の芸術は街頭から来たものではない。私は、落書き文化を利用できるのではないかと考えた。犯罪に近い文化がなぜ広まったのか、街との関係はどうだったのかを考える。落書きの本来の意味は、都市を読んで個人の都市地図を構築し、メッセージを伝える過程である。メッセージを伝えることが目的なので、落書き人はArtistではなくWriterと名乗っている。落書きと同じようなプロセスを経て、2つのタイプの落書きを変換する。Tagging&Bombing、現象を明らかにし、意見を伝え、対話と呼び起こすことができる大道芸空間を作り、芸術街の現代性に対する私の解釈を伝える。

透過塗鴉人的眼，建築人的手，打造一個當代的藝術街區。

基地選在新北市永和區的博愛街。曾經被規劃成花園城市的永和，在規劃的失控下，變成了全台人口密度最高的城市。這樣的背景下，因企圖使擁擠的永和也有一個怡人的公共空間的理想，博愛藝術街誕生了。然而卻是以藝術取代原有巷道的作法，造成藝術街的藝術根本不是來自街頭。這使我認為應該能和塗鴉文化借鏡，了解為什麼這個趨近犯罪的文化能夠壯大流行，其和街道的關係是如何。

設計邏輯塗鴉的本意是透過閱讀城市、建構個人的都市地圖，然後傳達訊息的過程。也正是因為目的是傳達訊息，塗鴉人自稱writer而不是artist。透過與塗鴉創作類似的過程，轉化塗鴉的兩種類型：Tagging&Bombing，打造一個能夠揭露現象，傳達觀點，並引起對話的街頭藝術空間，傳達我對藝術街的當代性的詮釋。



NEW BAZAAR IN SECOND MARKET

民生商業重組・再進化

廖婕苓

中原大學建築系曾光宗教授指導



現代では急速に発展している都市の中で、ますます多くの地域でデパートのような建物が建てられ始めた。閉鎖的で大きなボリュームを持っているため、都市との間に溝感が、地方文化との間に疎外感が生じ、消費の日常の中で非日常的な買い物場として生まれ、商業と民生の関係を束縛している。民生商業建築の発展過程を探究する中で、kaufhausの現在の産物(百貨店)とbazaar(市集)の間に断絶が生じ、百貨店の脈絡の中で、もう一つの非民生の商業状態に発展したことを物語っている。私は商業の脈絡の中に戻って、民生商業空間を見直して、民生商業建築プロセスの次の段階を発展させたいと思う。敷地は台中中区の第二市場を選んだ。社会問題による衝撃に直面し、時代に合わせて進化する消費モデルが民生ビジネスを衰退させている。第二市場には、ビジネス、歴史、文化の特質が搭載されており、それが第二市場の本質だと思う。そこで、新しい民生ビジネス日常を発展させ、第二市場を違う姿勢で保存し続けていきたいと思う。

現今快速發展的都市中，越來越多地區開始興建百貨公司建築類型，封閉又巨大型量體造成與都市間的隔閡，且與地方文化間產生疏離，消費日常上衍生成一種不是日常的購物場所，束縛商業與民生關係。在探究民生商業建築發展進程中，kaufhaus 現今的產物（百貨公司）與bazaar（市集）之間產生了斷裂，說明百貨公司脈絡裡演變成另一種非民生的商業狀態。我想回歸到商業脈絡裡，重新審視民生商業空間，試圖發展出民生商業建築進程的下一階段。我將回到以販賣民生商業為主的市場，操作基地選擇在台中中區第二市場，面臨社會問題造成的衝擊、與時俱進的消費模式，讓民生商業逐漸式微，對於第二市場，承載了商業、歷史、文化的特質，我認為這是第二市場的本質。因此將發展出新的民生商業日常，讓第二市場以不同姿態繼續保存下去。



建築元素的記憶與當代性

The Memory Meaning and
Modernity on Elements of
Architecture.

黃湛凌

中原大學建築系黃俊銘教授指導



劇場は都市の脈絡の中で普遍性を持ち、みんなは劇場に対する集団記憶を持つ。私はこの記憶と印象がどのように記憶、建築要素とその現代の意義を形成するのかを知りたい。劇場がもたらした集団記憶を引き継いでいきたいが、ただレトロなノスタルジーだけであつてほしくない。そこで、空間と記憶を解体して劇場の記憶と密接な関係があると思う5つの建築要素に変えた階段、斜面、立面と表層、柱と材料、より単純にこれらの記憶要素を再構成して強調することによって、継続的な記憶を創造すると同時にその空間は現代的である。空間体験、身体知覚、場所印象などの新しい現代的な空間を持つ必要があつて、同時に記憶を継続し、既存の劇場の空間や機能に制限されない。そこで、上記の5つの空間要素を通して、空間体験、身体知覚、場所印象から、過去の経験に呼応する空間を作り、新たな利用可能性を探していきたいと考えている。

戲院在城市脈絡中具有普遍性，大家擁有一種對戲院的集體記憶...而我想瞭解這種記憶與印象如何塑造...

記憶、建築元素與其當代意義我希望延續戲院帶來的集體記憶，但不希望只是一味地復古或純粹的懷舊。所以將空間與記憶解體，化為5個我認為與戲院記憶息息相關的建築元素樓梯、斜坡、立面與皮層、柱列以及材料，更單純的通過重新組合與強調這些記憶元素，創造延續記憶但當代的空間。空間體驗、身體感知與場所印象要有新的、當代的空間，同時延續記憶、不被既有戲院的空間與機能限制。於是我想透過上述的五大空間元素，從空間體驗、身體感知與場所印象著手，創造能呼應過去經驗的空間，同時尋找新的使用可能。

2022 年 3 月 1 日発行

発行 東北工業大学 建築学部 建築学科
協力 中原大学
デザイン 小山田陽太 吉岡昇一 五十嵐健太
翻訳 劉雨萌

東北工業大学 建築学部 建築学科
〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35-1
TEL 022-305-3600
<https://www.tohtech.ac.jp/>

本事業は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）
2021 年度さくらオンラインプログラムに採択されて、
経費の補助をいただき実施しました。